

# 道 徳 科

永 江 優 美

## 1 道徳科における「よりよい未来を志向する子」

グローバル化が進展する中で、様々な価値観をもつ人々と互いに尊重し協力し合いながら生きることや、情報化社会において情報モラル教育の充実を図ることが重要な課題になってきている。また、いじめの認知件数が増加傾向にある。いじめの本質的な問題解決に対応するために、「いじめは絶対に許されない」ことを道徳教育の中で学べるようにする必要がある。こうした課題に対応していくためには、自分の倫理観をもつことが求められる。さらに、多様な価値観を認め、他者と対話しながらよりよい資質・能力を獲得することが大切である。

新学習指導要領では、道徳科は「特別の教科 道徳」という形で新しく位置付けられた。道徳教育の目標である「道徳性を養う」ためには、行動そのものではなく、人間としてよりよく生きようとする人格的特性といった内面的な育成が大切とされている。そのため、登場人物の心情理解に終始する道徳や価値観を押し付ける道徳から、自分とのかかわりで道徳的価値を多面的・多角的に考える「考え、議論する道徳」に転換していかなくてはならない。そうすることで、「道徳的諸価値の理解」「自己の生き方についての考え」「自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性」を身に付けることにつながる。さらに、道徳教育は様々な資質・能力の育成のために、「特別の教科 道徳」を要として、各教科と関連付けながら教育活動全体を通じて行うものである。また、学校だけでなく家庭や地域と協力しながら、子どもによりよく生きるための道徳性を養うことが今まで以上に必要視されている。

道徳科では、教材を用いて自分を主人公に重ねたり、客観視したりしながら自らの行動について立ち止まって考えていく。その際、生活体験や経験を想起しながら、道徳的価値について課題意識をもち続けることで、自分なりに考え、生き方を選択していく。さらに、多様な考えにふれることで、他者の考えと自分の考えを比較しながら多面的・多角的に考えることができる。本校の道徳科では、「よりよい未来」とは、「よりよい生き方」ととらえる。道徳的実践力は、押しつけによって身に付くものではなく、知識として身に付けただけで達成できるものでもない。また、正しいとわかっていても、実生活で行動できないことも多い。このことから、「よりよい生き方」とは、どう行動すればよいかわかっているけれどできない心を、少しでも前向きにとらえ直しながら行動しようとする姿であると考えられる。

以上のことから、道徳科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・生活体験や経験を想起しながら 自己を見つめ 課題意識をもち続ける子
- ・他者の考えと自分の考えを比較しながら多面的・多角的に考えられる子
- ・学びを生かして 「よりよい生き方」について前向きにとらえ直す子

## 2 道徳科における決める授業デザイン

子どもの実態と発達段階を理解した上でねらいを明確にし、授業のゴール時の子どもの姿をイメージしながら授業を構成する。そうすることで、自分事として道徳的価値について考えをもつ（決める）ことができる。また、教材をどのように活用すれば子どもが主体的に問題解決に取り組み、道徳的価値の意義や重要性を理解することができるか吟味する。その際、主人公のもつ迷いや葛藤、人間としての弱さはどこなのかを明確にし、道徳的価値をきれいごとではなく本音で考えられるようにする。

子どもは教材を通じた学習の中で、自分を主人公に重ねたり、客観視したりして考えを巡らせていく。自分の考えと反対の意見についても考えることで、個の中でも、それぞれの意見について比較したり吟味したりすることができる。自分の意見や改良点などを判断し直す（決める）ことで、考えの深まりや変容が期待できるであろう。また、道徳の時間では、学級で一人一人が本音で話し合うために豊かな人間関係が必要である。自己存在感を大切に学級経営を土台とし、普段から、共感的に理解し合える学級づくりをしていく。そうすることで、一つの道徳的価値に対して自分の意見だけでなく、友達の見解も取り入れ、いろいろな見方でとら

えることができる。その結果、自分の考えが再構築され、最終的に「自分はこういう見方を大切にしたい」「自分はこれを大切にしていきたい」という自分なりの意見を手に入れることができる。一人一人の考えを共有していく中で、他者理解もできるようにしていきたい。

さらに、授業の最後に自らをふり返って変容や成長を実感したり、これからの課題や目標を見つけたりするためにふりかえりの視点を与える。そうすることで、自己課題を今後につなげ、「よりよい生き方」を志向し、次の行動やこれからの生き方を決めることができる。その際、正しいと分かっている、実生活で行動できないという人間のもつ弱さについての人間理解も深めていきたい。

### 3 決める授業の手だて

#### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

導入時に、生活体験や経験を想起させて道徳的価値や教材との関連を図ったり、教材に描かれた状況において「自分だったらどうするか」など課題意識をもたせたりする。例えば、事前にアンケートを行ったり、教材の内容を理解するために人物や場所についての紹介をしたり資料を視聴したりする。

また、問題解決的な学習も取り入れる。一人一人が生きる上で出会うであろう様々な問題に対して、主体的に対処するために、道徳的価値について自覚し、自分なりの考えをもてるようにする。そのために、「どうすればよいのか」「どうしてそのようなことが起こったのか」といった原因や背景にせまる発問を工夫していく。

このような手だてを行うことで、ねらいとする道徳的価値への方向付けができ、自分とのかかわりで課題意識をもち続けることができる。と考える。

#### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

多様な視点から根拠をもって判断するために、一つの視点からではなく、多面的・多角的な視点から考えることが必要となってくる。しかし、それは発達段階上難しいこともある。そのため、多面的・多角的に考えるために二つの手だてを行う。一つ目は、当初の自分の考えとは異なる視点で考える発問を行うことである。二つ目は、「アスプロ(Astral Projection)思考」を取り入れることである。「アスプロ思考」とは、自分のもっている思いや考えからいったん離れて、他の意見を肯定的に考え、自分と他を比較・吟味することで、どちらがよりよいかを再構築する一連の思考の流れである。これにより自分の思考との比較や吟味が客観的に行われ、多面的・多角的に考えることで考えの深まりや変容が期待できる。自分とは反対の意見を考えることで、他者としての他だけではなく、自分の中の他とも比較しながら考えることができる。

また、友達の感じ方や考え方と比較しながら、自分の考えをさらに広げ深めるために、学習形態を工夫する。例えば、ネームプレートなどを活用して多様な考えにふれられる場を設けたり、役割演技や動作化を取り入れたりする。他者の考えと自分の考えを比較しながら多面的・多角的にとらえられるようにしていきたい。

#### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

思いや考えをワークシート等に記録して残すことは、自己の変容を意識し、自覚を高めていく手段となる。授業を通して何に共感し、自分の考えがどう変わったのか、自己を見つめ直す内省の場を設ける。視点をしばったワークシートや図・絵で心の動きを表す構造的な板書などを工夫し、内省する時間を十分に確保する。

終末では、本時で変容したことや学び、これからどう生きていきたいかなどのふりかえりを書かせる。ふりかえりを書く際に、授業のねらいの根底にある道徳的価値を子どもが一層主体的に考えられるようにするために教師の説話を行う。教師の説話では、教師自身の思い出や体験、児童の日常生活における身近な話題についてふれる。教師の説話を取り入れたら、時にはゲストティーチャーからの話を聞いたりすることで、人間理解についても深めていく。

こうすることで、子どもは道徳的価値を自分とのかかわりで考えることができるようになるだろう。また、今後の道徳的判断力、心情、実践意欲や態度を育てることにつながる。さらに、変容した自分を肯定的に受け止め、前向きにとらえ直していくことができる。と考える。